

---

# **仮面ライダーディケイドと遊ぼう! ~キャラ崩壊しちゃおうぜ!~**

仮面ライダーが大好きすぎる人その名はsinne

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーデイケイドと遊ぼう〜キャラ崩壊しちゃおつぜ〜

### 【Zコード】

Z3519Y

### 【作者名】

仮面ライダーが大好きすぎる人その名はsophie

### 【あらすじ】

士達の目の前に、少女が居た。

その少女は鈴海良々と名乗った。

なんだかギャグで進んでいく感じの小説。時々シリアルもあるらしい。

\* 小説オリジナルキャラを作っています。あとキャラ崩壊あります。

## 一話「唐突すぎる始まり」（前書き）

何新小説始めてるんだお前ですね。

ララ「やつほ～！」の小説では何故か漢字表記になつて苗字変わつた鈴音ララです

ルル「同じく・・・鈴音ルル・・・」

ララ「でも、此処に私達来て良いのかな？」

ルル「混乱するかも・・・？」

ララ「ううん、土君達つて、何処に来るのかな～？つて」

ルル「あとがきじやない？」

ララ「だね、ま、とにかく、始まり始まり～」

ルル「あ、ちなみにこの小説は色々おかしいので、原作ファンの人  
は読むのを少し躊躇つたほうが良いです」

ララ「まあ、投稿者は電王以前の仮面ライダーは知らないからね・・

## 一話「唐突すぎる始まり」

此処に、士達が居る。  
あと、知らない少女も。

良々「はじめまして！私の名前は鈴海良々！」  
すずみ らいり

士「ああ、だからなんだ」

いきなり話しあった黒髪の少女に青年、門矢士は言つ。

良々「てわけで、皆で何か色々話しましょうー！」

ユウスケ「話が急すぎるし、初めて会う人達にそれはないだろ・・・」

「

続けて小野寺ユウスケが言つ。

良々「ふ、折角DCDの人も、オリジナルの人も呼んで、色々しましょーっとしようとしたのに、」

夏海「あの・・・いきなり意味が分からんんですけど・・・」

遂に光夏海も訊いた。

良々「あ、はいはい。えっと、今から、本編が真面目過ぎて色々ギヤグに走らなかつた（一部除く）のがちょっと悔しかつたのと他にやっぱオリジナルとDCDの人を絡ませたいな」とか投稿者の妄想した事がこれです！！」

夏海「せ・・・説明ありがといひやることます・・・」

夏海はとつあえず礼を言つ。

カズマ「やういう事で、俺が呼ばれたのか・・・」

其処には、剣立カズマが立つていた（剣立なだけに）。

ユウスケ「カズマー」

ユウスケがカズマの元へ行く。

士「成る程な、全員呼ぶつて事か

士が言つた。

良々「つて言ひ事ひしよ。まあ、何もしないんじや楽しくない  
からさつて」

良々はやうやく、何かを取り出して、投げた。

士「お前、何を投げた？」

士は良々に訊く。

良々「えーと、なんか、投稿者に渡されて、投げてつて。何が起ころかよく分からないけど」

士「は?」「ユウスケ「え?」夏海「ちよつとー」カズマ「なー?」

四人がそつ言つた瞬間。

良々の投げたものが光り、周りから化け物が現れた。

士「何やつてんだお前！……」

良々「分からぬよ～！！！だって、投稿者に渡されたし」

士「投稿者！……投稿者を出せ…………！」

夏海「な、何が何だか分からぬです～～～～！」

ユウスケ「とりあえず戦うしかないだろ～！」

? ? ? ? 「・・・・その必要は無い・・・・」

その瞬間。

何かが士達の前を横切り、化け物は倒れた。

? ? ? ? 「全く、投稿者も何やつてんだか、良々に何かあつたりどいつするんだ・・・・」

良々「縷々！」

士「誰だ？」

縷々「鈴海縷々。良々の双子の弟。で、あんたらが、投稿者の呼んだ奴等か」

士「ああ、そつらしきな。まあ、大体分かつた

夏海・ユウスケ・カズマ「「大体分からねえ（りません）！！！  
！」」「」

士に三人が突っ込む。

良々「でも、変だね？全員呼んだつもりだけど、カズマ君しか居ないみたいだね」

カズマ「それ初対面の年上に対しても失礼だろ・・・

ユウスケは思った、この流れじゃ、士も俺も、君付けだらうな・・・  
と。

良々「ま、此処で話してもしょうがないし、喫茶店に行こうか」

夏海「喫茶店・・・ですか？」

縷々「うん・・・僕と・・・良々が・・・普段居る・・・場所・・・

「

士「ま、とりあえず、行ってみるか

カズマ（一話からこんなで・・・大丈夫なのか・・・？投稿者・・・  
）

## 一話「唐突すぎる始まり」（後書き）

士「俺達があとがき担当か」

夏海「まあ、良いじゃないですか」

ユウスケ「だな」

カズマ「何故、最初から俺が居るんだ？普通に考えたら、順番として、ワタル、若しくは別の人だろ」

ララ「それは投稿者がブレイド好きだからだよ～」

ユウスケ「そうなのか～って何で良々ちゃんが此処に！？」

士「つていうか、ブレイドは投稿者見てないんじゃないのか？」

ララ「ん？まあ、ファンはあるつて」

夏海（そんなんで良いのでしょつか・・・？）

カズマ「まあ、いいか。じゃ、次回も宜しくな」

ララ「まあ、全員大体性格分からないから、うう覚え若しくは想像

だけどね」

士「俺は大体覚えてるらしいがな」

夏海「私もらしいです」

ララ「投稿者曰く、士君と夏海ちゃんは性格分かりやすいらしいよ

ユウスケ「俺とカズマは・・・」

龍と狼（龍はヤンkeeじいがせんなにヤンkeeしてたつけ？）（前書き）

ララ「なんか、サブタイが微妙にネタバレだね・・・」

ルル「龍でヤンkeeって・・・あいつしかいないだろ」

ララ「ちなみに、リイマジキャラは大体投稿者の好きなキャラ順に  
出てきます」

ルル「でも・・・リイマジキャラはハッキリ言って、カズマとかユ  
ウスケとかタクミぐらいしか性格は大体覚えてないらしい」

ララ「まあ、ユウスケ君とカズマ君は投稿者の好きな俳優さんがや  
つてるからね」

ララ・ルル以外全員「『『『それマジ（です）か！？』』』

ララ「それ、驚くところ？」

## 龍と狼（龍はヤンクトンじこがみやをなにヤンクトンしてたつナ？）

カズマ「題名については突っ込まないであげようか・・・」

コウスケ「それ・・・前書きとかあとがきで書いた事だよな？」

良々「黙れB」「要員」 物凄い笑顔

士（あいつ、物凄い笑顔で物凄い事言いやがった・・・）

カズマ・コウスケ「「誰がB」「要員だ！――！」」

縷々「良々・・・それは俳優の・・・」

良々「あ・・・間違えた」

間違えたで済む問題なのだろうか・・・。

良々以外の全員が考えた事であった。

「あれ？さっきまで取材用の写真取つてたはずなんだけど・・・

「学校から、帰ってる途中だった気が・・・」

士「シンジ！」「タク//じやないか」

シンジ「あれ？士。此処は一体何処だ？」

良々「ふつふつふ～。此処」「今すぐ帰れ此処はお前たちが居て

良い場所じゃない特にタクミ」 士

縷々「士……。それは良々に対しての言葉か、それとも、投稿者に対する言葉か、投稿者に対してなら投稿者を死ぬまで弄くり回しても構わない」

良々「縷々！ それ投稿者死んじゃう！」

カズマ・コウスケ「本当に、何したいんだろうな……この小説」

「

縷々「ちなみに、投稿者曰く、この小説はギャグ9割シリアス1割の小説だそうだ」

良々「シリアス一応入ってるんだ！！」

ユウスケ（どうやつてこんなギャグだらけ状態の小説をシリアスに連れ込むんだ？）

良々「あ、コウスケ君、ちなみに其処は投稿者のきまぐれらしいから、シリアス入るかはまだ検討中だつて。もしかしたら後で普通に連載するかもしれない可能性があるから」

縷々「良々が……遂に人の心を読む能力を手に入れた……」

ユウスケ「いやいやいやいや……。遂にって何だよー良々ちゃんそんなに能力持ってるのかよ！ あと人の心読むな！ …！」

カズマ「っていうか……未だにタクミが第一声しか発していないんだけど……」

良々「あれ？ そういえば、前回言った私の喫茶店に行くっていう話は？」

良々・タクミ・シンジ以外全員——遠い宇宙のかなたへ消えた・  
・・かな?」「」「

タクミ「つていうか、せっかちやつと話しつけてもらえたのにまた無視!?」

縷々「・・・よし、今から天の道を行く人を連れてく「お前は少し  
自重しろ！――！」カズマ

良々「じゃあ、とりあえず、喫茶店行こう。」

と詰う事で、喫茶店に来る事になつた一行。

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

良々「じゃ、お腹も空いたと思つて、飯作るか」

縷々「良々の料理を食べれるだけ幸せと思え」

縷々はカッターナイフを皆に向けながら言つ。（勿論良々には指してない）

夏海「つていうか、さつきから私は一言も発してないじゃ無いです

か！」

ユウスケ「確かに・・・。ナニコト点では、まだタクミの方がましだつたのか・・・」

タクミ「夏海ちゃんひとりあえずみません・・・。」

良々「じゃ、料理を作るにあたって皆に頼みたい事があるんだナゾ。・・・」

カズマ「何だ？」

良々「縷々が、キッチンに入らなにように見張つて。入つてくるようだつたら、ちょっと変身して戦つても良いから」

副音声【てめえら、縷々を絶対にキッチンに入らせぬなよ。入ったらいの世の終わりだ】

何気に副音声が怖かつた気がするが、皆はどうあえず良々の言ひつとおり縷々からキッチンを守つていた。

良々「あ、ちなみに、夏海ちゃんは戦わなくて良いよ。てか戦わないで」

夏海「・・・あ、はい・・・」

それが、大きい戦いを起すとも分からず。

縷々「僕だつて・・・良々の手伝いへりこできる・・・おとなしく、そこをびけえええええ！――！」

士「タクミ！」

縷々の一撃に軽くタケミが飛ばされる。

エウヌケーとんだけ強しんだよあいー！」

カズマ一エウスケ！危ない！」

繩々アノノノノノノ・・・・ノノツノノツノノ!!!!!!!!

此處即爲  
假刀劍也

卷之三

シンジーああ…本気で…行くぜ!!

そしてシンジは変身して纏々に掴みかかる、  
か。

シンジと縷々以外全員「あいつ本当に人間か！？！？！？！」

まあ、実際縷々は人間じゃないらしいのだが・・・其処はまだ言わないでおけ。

カズマ「クソッ、あいつを止めるには変身して戦うしかないのか！」

ユウスケ「だな・・・」

士「あいつも、ある意味破壊者だな・・・」

タクミ「うん・・・」

タクミが誰の言葉にうんと言つたのかはさておき、全員変身する事になった。

一方、良々と夏海はと言つと。

良々「～～～」

夏海（よく近くであんな事が起つてゐるのに動じないのでしょうかね・・・？）

良々「ん～？それは慣れだよ～。夏海ちゃん」

またもや人の心を読んでいる良々を横に、夏海は呆れるしかなかつた。

続く

龍と狼（龍はヤンクトレーニングをなにヤンクトレしてたの？）（後書き）

士「ちよつとまで……」

ユウスケ「何だ士？」

士「あいつ人間か！？」

タクミ「あと、僕の立場が……」

夏海「途中まで空氣と化していた私よりはマシですよ……さつと・

・・

ララ「あ、ちなみに次回から私とルルは片仮名表記になります」

士「はあ！？」

ルル「投稿者が漢字表記は面倒だ・・・って・・・」

夏海「何でいきなりそうなるんですか！」

士「そうだ！ そうしたら名前が漢字な奴が減るだろー！」

ララ「士君怒る所其処！？」

ルル「次回は剣の恐ろしさを知る・・・

カズマ「？」

二話「前回話数を書かれてたけど無視する。ついでにルル暴走中誰か止めてくれた

士「日に日に題名が長くなつていいく気がするが……」

ユウスケ「いや、本当に長くなつてるから」

夏海「それにも・・・気になるんですけど・・・前回副音声で聴こえたララちゃんの声って何ですか・・・？」

ルル「それは・・・いつか言う・・・」

カズマ「今すぐは言わないんだ・・・」

ララ「ま、とりあえずあらすじっぽいことじょう・・・」

ララ以外全員「――――今更！？！？！」

タクミ「あれ・・・？僕とシンジの言葉は・・・？」  
シンジ「・・・・・」

ララ「前回は、私達の本拠地の喫茶店に来て、私が料理する事になつて、ルルをキッチンに入れないので、皆が戦つてくれてるよ」

タクミ「つていうか・・・キッチンに入れないので戦つて・・・」

ルル「其処に・・・突つ込んだら・・・負け・・・」

カズマ・ユウスケ「お前が言つな――」

士「意外と普通にしたな」

夏海「つていうか・・・まだ三話目にしてこの意味不明な話つて・・・どうするんですか・・・？」

ララ「とりあえずシリアルは入れないよつてするー！」

三話「前回話数を書き忘れたけど無視する。ついでにルル暴走中誰か止めてくだ

タク!! ドビービーするのー?」それでー!」

「…俺に訊かれてもわからねえよ！…！」

ユウスケ「人ともどりあえず戦って！」

現在、ルルがララが調理中のキッチンに入ろうとして暴れています。  
その為、此処に居るライダー達（夏海除く）は戦っています。

その時、夏海の声が聴こえた。

夏海「皆さん！！！料理作り終わりましたよ～！！」

皆が喜んでいたのは言つまでも無い。

\* \* \* \* \*

カズマ「で、さっきのは一体なんだつたんだ・・・」

タクミ「つていうか・・・よくララちゃん一人で出来てたね・・・」

士「俺達がこんなに苦戦するのにな・・・」

「其処は氣合で

ララ「え、だって今田君お姫さん風るし・・・」

ルル ララを・・・いじめるな・・・」

ルルの静かな怒りに全員納まる。

「ライダーライセンスを取得するための練習です。

ララ「じゃ、早速。で、本編無視して、この話を色々してこいつーー！  
なので、敵とか味方とか関係なく、話を進めて行くうじやないか！  
！で、この小説は出来ました。でも・・・」

ルルーラ、それ以上はあとがきで」

ラテ・あーじめん

ララ・ルル以外全員（なんか・・・）つちが前面突っ込みになつて  
るんだけど・・・）

とりあえず、全員疲れたため、寝る事になつた。

101

士・シンジ

102

ユウスケ・カズマ

103

タクミ・ルル

104

ララ・夏海

とつあえず、タクミに「愁傷様と言つてもいい。

ユウスケ「…………タクミ…………頑張れよ…………」

タクミ「えー……ちょっと待つてください……！」

カズマ「…………タクミに何か良いたいが何もいえない。

タクミ「カズマさん…………そんな哀れむような目で見ないで下をこ…………」

ララ「ま、まあ…………。これもルルが勝手にくじで決めたしね…………」

ルル「うん。男女混合でやつた」

ルルの爆弾的発言に全員。

これまでに無い叫びが聞こえたとや。

タクニ「よ・・・余計疲れて来た・・・」

ユウスケ「だな・・・・風呂入つて寝よう・・・・」

カズマ「よし、風呂入ろう。・・・」

「はい、着替えは適当に置いてあるから、服は洗濯機の中ぶつこんでて良いよ。」

皆は、風呂に入つていつた。ちなみに、ちゃんと男女別れている。

数分後、カズマが絶叫で疲れるとも知らずに。

カズマの着替えのところには、どうみても女物が入っていた。  
「…………！」

ルル「大丈夫……僕のところも女物入つてた……」

後でララに訊くと。

「あ、『こめん』男物の服足りなくって タクミ君とビックリした  
よつか迷つたけど、タクミ君はまだ未成年だから、カズマ君にしち  
ゃつた」

カズマ「しちゃつた じゃねええええええええええええええええ  
えええええええええええええええええええええええええええ  
ええええええええええええええええええええええええええ  
えええええええええええええええええええええええええ  
えええええええええええええええええええええええええ  
…………！」

「…………！」

ユウスケ「ま、まあ……カズマ、気持ちは分からないが、落ち着  
け、な？」

カズマ「はあ……はあ……。ユウスケの言ひ分にちょっと  
イラついたが、とりあえず……飲み物が欲しい……」

カズマは息切れしている。

其処に、ルルが黒い飲み物かどうか分からぬ物を持ってきた。

カズマ「な・・・なんだこれ・・・」

ルル「飲み物・・・」

ララ「あ、あああああああ！！！カズマ君ーお詫びと言つてもなんだ  
けど、はい！お茶！」

ルルを静止するかのよつこやつて来て、ララがお茶をカズマに渡す。

ユウスケ（あれつて・・・飲み物なのか？）

タクミ（疲れましたね・・・）

士（だな・・・）

続く

二話「前回話数を書かれてたけど無視する。ついでにルル暴走中誰か止めてくれない？」

カズマ「…………」部屋の片隅で体育すわりをして落ち込んでいる。

ユウスケ「な？カズマ・・・少しは我慢しろ。な？」

カズマ「な？じゃねえええええええええええ！」

限りなくカズマが絶叫キャラになってしまっている……。

元祖絶叫キャラ（「ディケイドでの）のショウイチさんも居るのに・・・。

つていうか・・・今回アスマ君とワタル君が出るはずでしたwwwララ達をカタカナ表記にしました。面倒だったので。

前回のワラの副音声は話を進めれば分かります。  
うーん。シリアルズ専用の話作ろう。うん。

## 四話「カズマとタクミが遂に壊れたようだす」（前書き）

士「前回の『テイケ崩壊は・・・』

ユウスケ「なんだよその略し方！」

カズマ「俺の扱いどうにかしてください・・・」 女装させられた

タクミ「僕、絶対死にますよ・・・」 ルルと同室

シンジ「俺なんか・・・前回台詞が・・・」 前回台詞殆ど無かった

ルル「連載が始まったもう一つの小説とも関連つていうか、完全にそれをギャグにすつころばせた奴的になるらしい」

夏海「なんか・・・心配です・・・」

ユウスケ「てか、まずサブタイトルに突っ込みいれような・・・」

## 四話「カズマとタクミが遂に壊れたよ」です

「ララ」「おはよう～」

ララは元気よく挨拶したが・・・。

タクミ「おはようございます・・・」

カズマ「・・・・・・・・」

シンジ「前回の恨み・・・」

約三名が、元気無いと言つたが、なんだか、疲れ果てていると言つた  
・・・。

そんな状態になっていた。

ルル「・・・・?」 少なくともタクミの疲労の原因

「ララ」「む～」 カズマの元気が無い原因

士・ユウスケ・夏海「・・・・?」 前回台詞があつた人達

「ララ」「まあ、ルル、カズマ君。はい、服昨日徹夜で作つたから

そう言って、ララはルルとカズマに服を渡す。

カズマ「・・・・徹夜！？！？！？」

ルル「ララ、そんな無茶しなくて良かつたのに！僕なら、僕ならどう

んな格好でも良かつたのに！」

ユウスケ「とりあえずルルは自重しろ！色々！前回から……！」

ルルにユウスケが突つ込む。

「まあ、とりあえず、監、何するの？」

ルル「とりあえず、全員。叫べば良いと思つてない？」

ルルの一言に、ライダー達は固まつた。

カズマ「そういうえば……俺とか……前回から叫んでばっかりだ  
つたな……」

ユウスケ「だな・・・」

士「反論出来ないのが・・・悔しい・・・」

夏海「……」ちなみにあまり叫んで突っ込んでない

シンジ「・・・・」あまり台詞が無い

タクミ「…………」そもそも云ふよつたなキャラじやない

「あ、え？ どうしたの？」

ララ一人だけ、何も分かつてないようだが。

シンジ「つていうか、今回は、俺が自由にして良いか？」

シンジは、カメラを持ちながら言つ。

「ララ「ん?」。良いけど」

シンジは歓喜して全員にカメラを向けた。

ルル「え、シンジ……？」

「シンジ君が絶叫キャラ候補にいっちゃんつた！――」

ルル「なんかやつとララが突っ込みに行つた気がした！」

ユウスケ「いやいや・・・ルルも十分ボケだから・・・」

ララの突っ込みにルルが驚いてユウスケが突っ込む。完全にユウスケは突っ込みキャラとして位置されてしまったのである。

士「俺達の出番が……」

タクミ「どうせ僕なんて……映画版さえも役者さんの色々で居なかつたし……」

士は落ち込み、タクミは負の街道まつじぐらである。

ララ「まあいいや、はい」

タクミ「？」

ララはタクミに飲み物を渡した。

「これで、全部吐き出しちゃいなYO」

タクミ「ふふふふふふ……はああああああああああはははははは！」

ライダー達「タクミが狂った！－！－？？？」

シンジ「おお……」

カズマ「何呑気に写真撮ってるんだよー」

ララの渡した飲み物により暴走するタクミ。

それに驚く士達だが……シンジは呑気に写真を撮っている。

ルル「ララ・・・。何渡したの・・・？」

ララ「ん？。ああ、お酒・・・かなあ？」

ルル「未成年が何で持つてるそして何故に渡してるー?ー?ー?」

遂にルルまでも突っ込みキャラの立ち位置に行ってしまい、ボケと  
突込みが混合してる状態だ。

暴走状態の人も若干居る為、所謂力オスという状態だ。

続く

ユウスケ「いやいやいや、何で此処で切るのー?ー?ー?」

四話「カズマとタクミが遂に壊れたようだす」（後書き）

ユウスケ「まず言いたい」

ララ「何？」

ユウスケ「疲れた・・・。突つ込みやめたい・・・」

カズマ「ユウスケ。頑張るんだ。安定した突つ込みは、今お前しか居ないんだからな」

ルル「うん・・・頑張れ・・・」

ユウスケ「お前等俺をどう思つてるんだ！」

ララ「あ、そうそう。前回私13歳とか言つたけど訂正。まあ、一応13歳？っていう事になつた」

士「大体分かつた。それは年齢表記を明らかにしないって事だろ？」  
ララ「うん、何か、もう一つの小説の方で明かすからって、こっちでは一応13歳つて言つ扱いになるけど・・・皆の見方が13歳つて事で」

ユウスケ「成る程な」

ルン「本編でまだまだ出番は先だけど、『んにちわ』

ロン「俺は金銅きんどうロン。こつちは姉のルン」

ルン「で、何で私たちが来たかと『うど・・・』

ロン「知らん」

ルン「はあ？ 知らないで来たの！？。ロン、ちょっと馬鹿じゃないの！？」

ロン「ま、次回は、色々な人が暴走するつてさ」

ルン「ちょっと待つて！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3519y/>

仮面ライダーディケイドと遊ぼう!～キャラ崩壊しちゃおうぜ!～  
2011年11月20日03時54分発行